

令和4年1月21日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

最終試験の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 李 竺楠

学位論文題目

謝罪言語行動に関する日中対照研究 —インタラクシオンの視点からの考察—
(A comparative study of apology in Japanese and Chinese : Consideration
from the perspective of interaction)

最終試験の概要

学位(博士)論文に関する最終試験を、令和3年12月27日15時30分より法文学部202号教室において実施した。最初に申請者本人より学位申請論文の概要について説明がなされた後、4名の委員がそれぞれの立場から論文についての質問を行ったが、申請者はそれぞれの質問に対して自らの主張するところを説明した。委員との間で行われた主なやり取りは次のとおりである。

まず、試験委員からは本論文での謝罪の概念に関わるいくつかの質問がなされた。データの取り方については、「すみません」のように形式上は謝罪であってもその機能は感謝の代わりとなる場合があり、そのような談話を謝罪場面として取り扱ったのかという質問があった。それに対して申請者からは、感謝となる場面は除いてデータとしたとの答えを得た。また軽度の不快状況が日本の談話に多いという点については、医療ドラマで注射をする場合などに日本では相手の不快感への配慮を示すが、中国ではそのような場合は少ないことなどによるという説明がなされた。さらに謝罪への応答について、謝罪の送り手が何を言ったかではなく、受け手がどのように応じたかを分析の中心とすべきではなかったかという指摘がなされた。これに対して論者は、それは談話構成上の「連動性」の問題であること、その点に配慮が不足していたが分析で検討すべき点として論文中でも示しているとの答えがあった。そのほかにも、謝罪行動をインタラクシオンとして捉える試みであるにもかかわらず、本論文が依拠してきた先行研究の枠組みは送り手中心のものであ

り、第三者的視点や談話進行の時間幅などの要因を組み込んでより強度の高い理論化が必要である点などが指摘された。

申請者との質疑応答の後、試験委員による協議を行った。謝罪行動の対照分析を行うために、先行研究の問題点を丁寧に洗い出して新たな分析枠組みを提示したことは評価に値するが、上述のとおりインターアクションとして言語行動を捉えるには議論がやや不十分であった点は残念である。しかしながら、先行研究を丹念に精査して談話に着目した新たな対照研究の方向性を示した点、ドラマのデータではあるが発話行為を超えたレベルで謝罪行動を捉えようと試みた点、さらには談話構成の分析で注視すべき相互行為の特性を明らかにした点など、従来の研究をさらに一步踏み込んだ成果も見られることから、今後さらなる進展が期待される。

以上により、博士(学術)の学位を与えるに十分な学力と見識を有するものと認定した。

授与する博士学位 学術

最終試験結果 合

試験委員

主査 太田一郎

副査 丹羽謙治

副査 尾崎寿宏

副査 高木千恵